

ただいま、 リニューアル中 ～鹿児島港新港区～

耐震強化岸壁

ふ頭用地

旅客待合所

貨物上屋

新港区の現在の状況

整備されてから40年以上が経過し、建物や岸壁の老朽化が進んでいます。

岸壁背後のふ頭用地では、狭いスペースでフォークリフトやトラックなどによる荷役作業が行われており、フェリーを利用する方々はこの荷役作業の中を通り、急なタラップを上り下りしなければならない状態です。荷役作業中やフェリー乗降時の安全性が懸念されています。

また、道路のすぐ近くにまでコンテナが積み上げられるなど、一般の方々が近づきにくく緑の少ない無機質な景観となっています。

鹿児島県は、数多くの離島や半島地域を有しています。そのため、港湾は県民生活や地域の産業を支える重要な交通基盤です。

鹿児島港新港区は、昭和34年から整備が始まり、昭和43年5月に沖縄航路が、昭和47年11月に大島航路が本港区から移転してきました。現在は、奄美・沖縄航路のフェリーや種子島航路の貨物船などの発着所となっています。

年間約200トンの貨物を取り扱い、約15万人の乗客が利用しており、奄美など離島に住む人々の生活を支える、鹿児島の玄関口としての役割を担っています。

荷役作業中の狭いスペース
を通して乗下船するため危険



岸壁背後にあるコンテナ置き場や荷役作業スペースが狭いため、荷役作業の効率が悪い



昭和42年の鹿児島港新港

改修工事の概要

平成23年度からの改修工事により、フェリー乗降時や荷役作業時の安全性の確保、震災時の緊急輸送物資の取り扱いなどが可能となります。また、緑地を整備し、水際線を開放することで、海に親しむ場として県民の皆さんにご利用いただく予定です。

- バリアフリー化や乗客と貨物を分離することで、乗客の皆さんが安全・快適に乗降ができるようになります。
→ **旅客待合所の建て替え、ボーディングブリッジ(搭乗橋)の設置**
- 荷役スペースの不足を解消し、荷役作業が効率よく安全に行えるようになります。
→ **新しい岸壁などの整備、埋め立てによる新しいふ頭用地の造成**
- 大規模な地震の発生や災害時にも、船舶による緊急物資の輸送や復興の際の建築資材の搬入等ができるようになります。
→ **耐震強化岸壁などの整備**



旅客待合所
ポンプ車でコンクリートを流し込んでいます。

【 整備を行う主な施設 】



耐震強化岸壁 (水深9m)
岸壁になるコンクリート製のケーソン※
を運んでいます。

※ケーソン：フランス語で「大きな箱」という意味。
鉄筋コンクリートや鋼製の箱または円筒状の構造物のことで、防波堤や岸壁などとして使用します。

旅客待合所や水深9mの耐震強化岸壁、水深6mの岸壁などの工事を進めています。

これらの施設は、**平成25年度中の一部供用**を目指しています。

完成イメージ



【 鹿児島港新港区完成イメージ 】



【 旅客待合所完成イメージ 】

新港区では、岸壁や旅客待合所の整備など港湾機能の向上はもちろん、緑地の確保や沿道の植栽、屋上の緑化など景観や環境にも配慮した「みなとづくり」を進めていきます。